

日本文化と禅



明恵上人、良寛禅師の和歌とその背景

堀井 妙泉

世界の文化の中でも稀有な短詩形文学と言われているのが、日本古来の和歌であります。今日は、その和歌を通して禪の真髓に触れてみたいと思います。

禅者には古来よりすぐれた余技がともなっていて、書を能くする人、画を能くする人、句を作り詩歌を詠ずることに秀でた人、その人々を数えあげれば限りがありません。こうした人々には、余技というにはあまりにも傑れた作品があり、その技能がそのまま、その人の禪的境涯の表^{ひょうしやう}象と見られるものが多いのであります。

鎌倉時代、『夢の記』で有名な明恵上人も、精神文化人として世界に誇れる人で、まず思い浮かぶのは、「樹^{じゆじやう}上座^{ぞう}禅像」ですが、これは明恵上人を画がいたもので、鎌倉時代の名画と言われています。作者は明恵上人の弟子の恵日坊^{じやうにん}成忍と伝えられていますが、美しい松林の中で上人は木の中から生まれてきたように、枝と枝との岐れ目に泰然自若として座禅を組んでいます。自然の中にどっしりと根をおろした上人の姿は、禅気に満ちあふれ柔和な表情の奥に秘められた気魄^{はく}には近づきがたいものがあります。傍らの枝には香炉と数珠が掛けてあり、木の根元の方には下駄がきちんと揃えられてあります。明恵上人の遺訓に「願ふ所は永く世間の榮華を捨てて、名利^{めいり}のきづなにはほだされず、必ず文殊の威神に依って、仏法の奥義を極めんと、身命を賭して修行に励むべし」とありますが、日常生活を共にした弟子の成忍だからこそ、師の内面世界を画に表わすことができたのでありましょう。

当時は、東大寺の最高府の高僧たちは創建当時の雄大な理想を忘れて、徒らに煩瑣な仏教哲学に走り、学僧達の間にも争いが多く、一方では僧兵をたくわえて政争に介入し、平家の焼打ちに会ったことなどもありましたが、明恵上人には、そのような僧の行いは「仏法のアダ」と見えたようでもあります。

しかし、鎌倉時代の高僧たちの中には、道元禅師や親鸞上人、一遍上人などすぐれた祖師方も多く、荒野の中から咲き出でた花々のように衆派を起こしたり、聖ひじりの生活に徹したり、重源ちようげんのように事業家になったり、様々でしたが、明恵はその誰にも似ることなく、明恵が信じたのは宗派仏教ではなく、釈迦という偉大な一人の人間の教えでありました。座禅三昧の行によって真実を把握する道眼を磨き、真実に生きる道力を養い、以って自己を欺かずという釈迦の教えを守り、真剣に生きてきたことが伺われます。

明恵上人の生きた時代は、まさに激動の時代で、天皇から武士へと政治が移り、平家の全盛時代から、源頼朝の時代に変り、そして北条氏へと政権が目まぐるしく移動した時代でありました。

承久じようきゆうの大乱では、鎌倉十九万の大軍が京都を攻め、官軍はやぶれて多くの死者が出て、京都は大混乱に陥りました。後鳥羽上皇は隠岐おきへ流され、順徳上皇は佐渡へ流され、土御門上皇は四国へと移されました。

その時、戦火の中を着のみ着のままで逃げまどう朝廷の落人や子女子をかくまい、明恵上人は北条方の武士に捕えられ、六波羅へ引き立てられて行きましたが、ここで北条泰時に会い、お釈迦様の仏弟子としての態度をとり、泰時を大乘仏教にふかく感化させたことが印象ふかいところであります。

明恵上人は「自分は求道者であり、仏弟子であって、俗世間のことは一切関係せず、紛乱に当って、一方の味方となり、他方の敵となることは断

じてない。^{とがのを}梅尾の高山寺境内は殺生を許さない聖地として、仏に捧げられた土地であるから、境内においては、鳥獣さへ殺すことは許されない。まして人を捕縛し、殺傷することは許される道理ではない。自分がこの寺を管理しているかぎり、脅迫せられて逃げ込んでくる者は、必ずこれを收容し、庇護するであろう。それが仏弟子としての自分の神聖なる責任である」と。北条泰時に仏道を説き、命の尊さを説いて一步も譲らなかつたのであります。

その後、高山寺の別院として善妙寺を設け、承久の乱で戦死や刑死した人たちの未亡人や母親などが頼るところがなく、明恵上人の袖にすがってくる人が後を絶たず、それらの婦人を高山寺には置けないので、善妙寺に收容し、尼として仏道修行をさせて、救済された人は数限りないであります。

また、明恵上人は、世界の精神史においても稀有な遺産を残したと言われている『^{ゆめのき}夢記』があります。(毎晩、みた夢を記録したものです)

これは十九歳から六十歳で逝去する一年前まで、書きつづけてきた膨大なものでありますが、ほんの一部を^ひ抽いてみますと、「同二月十四日の夜、夢に云わく、一つの池を構ふ。僅かに、二、三段許りにして、水少くして乏し。雨、^{たちま}忽ちに降りて水溢る。其の水は清く澄めり、其の傍らに又大きな池有り。古き河の如し。此の小さき池の水満つる時、大きな池を隔つること一尺ばかりなり。今少し雨下らば大きな池と通ふべし。通い^{おほ}已りて魚、亀等皆小さき池に通ふべしと思ふ。即ち心に二月十五日也と思ふ。今夜の月此の池に浮かびて定めし面白かるべしと思ふ」と夢の内容を記しています。そして、この夢の解説をされています。

案じて云はく、^{これ}小さき池は此禅観也。大きな池は諸仏菩薩所証の根本三昧也。魚等は諸の聖者也。一一に深き義なり。之を思ふに水少なきは修行せざる時也。溢るるは修する時也。今少し信ぜば、諸仏菩薩通ふべき也、当時小さき池に魚無きは初心也云々と(禅観の夢)を細やかに説明しています。ここで禅観というのは、座禅をして種々の公案を観る修行であ

りますが、この夢は取り止めのない夢ではなく、覚めている時の日常生活の延長であり、禅定に入った時の正念が、そのまま相続され、無意識の世界にまで、届いているのではないか、と言われていました。

明恵はさまざまな夢を記^{しる}して、それを修行の原動力として生きてきたのではないかと思います。

詩歌もまた、心に浮かんだ^{うたかた}泡沫を文字に表わしますが、煎じ詰めれば、夢、幻に通^{つう}じるものであります。

○存らへてとはるべしとはおもひきや人の情も命なりけり

明恵（和歌集）

この歌の本歌が西行の「年たけて又こゆべしと思ひきや 命なりけり さよの中山」にあると云われていますが、明恵が西行に学んだのは、言葉上の技法ではなく、虚空のように澄んで何ものにも捉われない心で歌うことであります。

西行のように名歌を得ようとして行脚し、苦吟した専門歌人と違って、巧い歌を作ろうともせず、心の趣くままに数奇の調べをかなでています。

○雲をいでて我にともなふ冬の月風やみにしむ雪やつめたき

○くまもなくすめるころのかがやげばわがひかりとや月をもふらむ

この歌の出来た背景を明恵自身が記しています。

「元^{げんにん}仁元年十二月十二日のよる、天くもり、月くらきに花宮殿に入って、坐禅す。やうやく中夜にいたりて、出観ののち、禅定をといて、峰の房をいでて下房へかへる時、月雲間より出でて、光雪にかがやく。狼の谷にほゆるも、月をともとして、いとおそろしからず。」とありますが、月も花

も雪も、明恵にとっては、附合のいい友つきあいというか、自分と月が一如となって大自然の中に没入しているようです。「くまもなく」の歌などは一点のくもりもなく、澄んでかがやいている自分をみて月はわたしと同じだと思おうであろう、と詠んでいます。西行は桜の歌人と呼ばれていますが、明恵もまた月の歌人と呼ばれるほど、月の歌が多くあります。

○あかあかやあかあかあかやあかあかや

あかあかあかやあかあかや月

この歌は、歌とは呼べないような感嘆の叫びがみなぎっています。この歌については、いろいろな解釈がなされていますので、一つ、二つ、あげてみますと、むつかしい理屈をこねる人々への侮蔑であるとか、又は同時代の法師たちに対する烈しい怒りを表しているとか、本人の絶望の嘆息であるなど、いろいろ云われておりますが、私はそのようには思いませんでした。これは「鑊湯無冷処かくとうれいじよなし」ということで、何時でもどこでも正念に住し、心身の隅から隅まで生き生きとした正念に充たされていると解釈いたしました。

三十一文字に表われている正念は、終始一貫いささかのたるみもなく、一字の余念もまじえず煮え滾っています。結句の月は明恵自身を象徴しており、修行のすさまじさが伝って来るようです。

世間では、このような解りづらい歌を達磨歌としてあざける風潮がありますが、現代の有名な歌人の中にもこのような達磨歌を詠んだ人がおります。

○子は抱かれ子はみな抱かれ子は抱かれ

人の子は抱かれて生きるもの (河野愛子)

生まれ落ちた赤ん坊は歩けるようになるまで、人種を問わず、みな抱かれて育ちます。次の四句目の「人の子は抱かれて生きるもの」は、こちらは赤ん坊ではなく、大人の人間を指していますが、これも抱かれて生きるものだと云っています。

それが、何代も何代も循環しながら、永遠につづいてゆく「いのち」を見つめた歌であると思います。あたり前のことを、当り前に詠みながら真実が生き生きと光っています。作者の河野愛子は、大正十一年生まれ、「未来」という結社に所属し、中心女流として鋭いメタフィジカルな作風で活躍されましたが、昭和62年に逝去されています。造化を深く学んでおり、その思想が晩年の作品に表れております。

次は達磨歌ではありませんが、こころに一点の邪気もなく、至純の境に遊んだ歌を一首抽ひてみます。

○鉢盛は朝飼まつ山鉢伏は夕めし終へて月を待つ山

(太田水穂)

一読して、言葉の遊びのように見えますが、鉢盛も鉢伏もともに信州にある山です。作者は鎌倉の山荘に病臥して、故郷の山を思い出しています。いまは老病で何もすることもなく、日々の飲食の^{おんじき}ことのみが楽しみな己れをそこに投影しているのでしょう。死を待つばかりの心情として、一点の曇りもなく清らかであり、大自然のはたらきと同じように、無邪気で天真爛漫な風懐が表現されています。水穂は明治九年長野県にお生まれになり、大正九年歌誌「潮音」を創刊し、芭蕉研究会を結成され、芭蕉の文芸を指標とする日本の象徴を志して、今も脈脈として、受け継がれています。

昭和三十年数え年八十歳で逝去されましたが、その一年前の作品であります。

ほかにも魅力的な作者や作品が沢山ありますが、次の機会にゆずりたいと思います。



さて、次は良寛禅師の和歌と、その背景を見ていきたいと思います。良寛の書や漢詩、和歌は余りにも有名であります。禅の余技とみるべきではなく、良寛の禅そのものと見た方がよいのであります。禅者だからとて、特別な生き方をする訳ではなく、大自然の生命と共に喜んだり、楽しんだり、怒ったりしながら生きていくものでありましょう。良寛研究の、多くの書物に共通しているのは、生涯住職にもならず、特定の宗派とも関わりを持たず、托鉢生活をしながら、日がな一日子供等と、毬について遊ぶことが強調され、その心の純真さ、自在さ、優しさなどが賞賛されていますが、その遊びの奥に何があるのか？が語られているものは少ないようであります。

○つきて見よひふみよいむなやここのとを

とをとをさめて又始まるを

良寛といえば、手毬を直ちに思い浮かべますし、手毬といえば良寛を連想してしまうほどこのつながりは世に膾炙かいしやしています。大の大人が、女の子の遊び道具である手毬について遊ぶ姿に接し、そこに純心さを感じて感動し、誉め称えるのであれば、あまりにおそまつではないでしょうか。他の大人が日がな一日手毬について遊んでいたら、そんな人は軽蔑され、冷笑されるでしょうに。良寛に限って賞賛されたり、多くの画家に絵に描かれたりするのは、それは良寛マニアに過ぎないと思います。重要なことは、禅師が手毬遊びをどのようにしていたかを、知ることであります。

ある時、禅師が手毬つきを好むということを噂に聞いた貞心尼が、その心意を歌で問いかけております。

○これぞこのほとけの道に遊びつつ

つくやつきせぬ^{のり}み法なるらむ

(貞心尼)

と。手廻つきの中には、仏法の何か尽きぬものがあるのでしょうか？と問うたのであります。それに対する禅師の返歌は、先ほどの【つきて見よひふみよいむな、やここのとを、とをとをさめて又始まるを】と手廻つきに、仏法が有るか、無いのかという問いに対しては答えず、「一、二、三から十まで数えてまた始めに戻り、一、二、三と数える手廻つきを、あなたもついてみてごらんさい」ということであります。

仮に禅師が有無のいずれかを答えとして与えても貞心尼の方はそれを観念として、受け入れるだけでありましょう。「有」と聞けばそうかと思ひ、「無」と聞いてもそうかと思ふことでありましょう。

仏法の「有無」は、各人が自分の体験から割り出して確信する以外にないもので、そのため禅師はまず「つく」という行為を始めてみよ、と答えたのであります。一から十まで数えてまた始めに戻り、それを幾度も繰り返すという行為は座禅の数息観で、吸う息、吐く息の呼吸をかぞえることで、三昧境に入る修行です。何よりも正念を相続することが大事なことです。禅の基本は禅定三昧の行であり、それによって転迷開悟するのが、禅本来の目的であります。良寛禅師の手廻つきも数息観の場合と同様に、手廻をつく人の呼吸と手まりのリズムが一如となり正念の相続がどこまでも一貫し、三昧を行じており、良寛は悟りくさいことや、説教めいたことは一切説かず、子供たちには遊びを通して、仏法とは何かを説いたのでありましょう。

江戸時代の後期は、二百年來の禅林が荒廃し、真風を阻害する悪風があり、いい加減な禅僧や鄙俗^{ひぞく}の凡人のあやまった見解を、常に憂っていた良寛は、正しい法を行ずるために、孤絶の上にもさらに孤絶であったのであります。

貧しい生活をしながら、「本来無一物」の境涯を飄々と生きながら、万葉調の和歌や気品の高い漢詩や流麗な書を沢山残しております。良寛が他の僧には見られない情緒あふれる詩歌を多く詠まれたのは、法と情が別物ではなく、一つに融け合っているからであります。数多い歌の中から、五、六首鑑賞してみたいと思います。

○形見とて何を残さむ春は花

山ほととぎす秋はもみぢ葉

わたしが亡くなった後の思い出として、何を残したらよいだろう。このような貧乏生活では、残すものとて何もないが。そうだ、春には爛漫と咲く花々を、夏にはほととぎすの力強い声を、秋には美しい紅葉を贈ることにしましょう、ということであります。この歌は、1972年、川端康成がストックホルムにおいてノーベル賞を受領された時、日本の美の心の伝統として世界に紹介されたものであります。

良寛は出雲崎^{めいしゆ}の名主の家に生まれた人ですが、十八歳の時に出家し、二十二歳に備中の円通寺で国仙和尚の下で修行僧となり、三十三歳で印可^{いんか}を受けるまで十二年間、猛烈に禅の修行をしたのであります。その後寺の住職になる道を選ばず、托鉢^{こつじき}をしながら、無一物・無所有の生き方に徹した人です。托鉢とは、一種の乞食^{こつじき}のことですが、現代の人から見たら、働かないで他者から一方的に恵みを受けると思われるでしょうが、これは中々大変な行であります。托鉢僧^{こつじき}が在家の門前でわずか数十秒間の読経の中で、在家が思わず、財施^{せよ}を施与^{ほっせ}したくなるほどの法施^{ほっせ}があり、つまり福德の香りを与えるだけの菩提心や徳力がなければならぬし、そこには持戒、忍辱、精進、禅定、智慧という波羅蜜の力量も問われることになります。托鉢の究極のところは、仏と仏が布施という「本証妙修（仏の行）」の行において出会うということになります。

布施をする方は、善行をさせて頂いてありがとうございますと合掌し、

される方は本来備わっている仏性に気づいてくれてありがとうございますと、合掌するということであります。

良寛は托鉢をしながら、幾ばくかお布施の多い時は隣人にも頒け与え、常に無一物・無所有の生き方に徹しました。このような背景を見た上で、先ほどの歌にもどりますと、形見らしいものは何ひとつないが、春には色とりどりの花が咲き、夏には鶯やほととぎすが声を競って鳴き、秋には全山の樹々が紅葉して美しく照り映えることでしょうと。ふかい比喻として述べていることに気づきます。

「心華発明」すれば、悟ってみれば、天地自然の理法は少しも疑うことなく運行し、しかもその自然の理法は、一瞬たりとも停滞することなく循環し、遷流せんるしています。この天地自然の悠遠な「いのち」を自得してみれば、この現実の娑婆世界がそのまま極楽浄土であり、涅槃すなわち大調和の世界であります。良寛は、無一物中に、花あり、鳥あり、紅葉ありと大自然の生命の無尽蔵を歌に托して示しているのであります。

また、良寛は歌の心の響きをさながら、響かせるところが魅力でもありますが、一般には分かりにくいところもあるかも知れません。次にあげる歌は心の風景としてわかり易い歌です。

○秋もやや夜寒かどむになりぬわが門に
つづれさせてふ虫の声する

秋もしだいに深まり、夜は寒く感じられるようになった。わたしの家の前にきて、破れている着物や下着などのほころびを早く繕いなさいと、いうように虫がしきりにすだいています、という意です。間もなく冬に入る心細さが風流に詠まれています。

○いにしへを思いめへば夢かうつつかも
夜は時雨の雨を聞きつつ

深夜、独り時雨の音を聞きながら、過ぎ去った昔のことをいろいろ思い返すと、それは夢であったのか、現実であったのか、分からなくなってしまう、という意味ですが、人生は畢竟夢であり、今日あって明日あると期しがたい、だからこそ、今日唯今の一刹那を大切にするという人生観が浮き彫りにされて味わいふかいと思います。

○^{あま}天が下に満つる玉より^{こがね}黄金より

春の初めの君がおとづれ

この世の中に満ちあふれるほどの宝石や黄金よりも、ありがたく、嬉しいのは、あなたが春早々に訪ねてくれたことです。

これは、貞心尼に与えた歌ですが、人を恋う心の風景をなんの曇りもなく、素直に表わしています。以上で、歌の鑑賞を終わります。



日本文化は、詩歌をはじめ、茶道、華道、書、絵画、武道、弓道、お能や歌舞伎、陶芸や造庭など、世界にすぐれた素晴らしい文化が沢山あります。

もっとも日本的なものと言われている文化で、禅の影響を受けずに形成され、磨かれてこないものは、ないと言っても過言ではないと思います。その根っ子にあるのは、大自然の生命を共にした禅の精神であります。

先人方の残された多くの文化には、禅の修行と共に、その道を極められ、それぞれに偉大な革新をなしとげ、素晴らしい日本文化の新しい面を開いてきたと思います。

日本は詩の国、詩人の国とも言われております。

四季おりおりに循環する美しい風景、さまざまに移りゆく景観が、心

を呼びおこし、感性が磨かれ、和歌や俳句という簡素な形式を産んだのでありましょう。日本人の文化的心のすがたは、詩歌にあって、その詩歌が日本の美術を産む発想の源となったとも言われています。

私たちは、先人達の築いてきた日本文化を継承し、新しい時代にふさわしい清新な文化を創造して行かなければなりません。文化の源をなす禅は、如是法（大自然の大生命を体得し、如是に生きる）修行であります。禅の真生命は潤れることを知らぬ清らかな泉のようにこんこんと溢れ出るものであります。

その泉で現代人の渴望をいやし、現代文化の沃野^{よくや}をうるおし、独創的な日本文化の花を咲かしていきたいものと希っております。

そのためにも、禅の布教活動に、命を捨てて努力して行きたいと思えます。

今晚はこれで終らせて頂きます。

合掌

(2014年5月1日 本部道場において提唱)

■ 著者プロフィール

堀井妙泉（本名／美鶴）

昭和3年、函館市生まれ。歌人。新墾賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅主幹布教師。庵号^{れんしやう}／蓮 昌庵。
